

ヘレニズム時代における二つの快楽主義

02K041 長田真人

ヘレニズム時代の哲学は、プラトンやアリストテレスの哲学の何がしかを受け継いだが、それまでの哲学のように、自然界のアルケーは何であるかとか、イデアは存在するかとか、自然界の変化はどのようにして行なわれるかには余り関心を示さなかった。この時代の哲学は、途方にくれる人々の要求にこたえて、人生のよりどころとなるものを提出しようとしていた。最大の関心は、人々は、どうしたら幸せになるかということだった。

1. キュレネ派〔肉体的快楽主義、創設者：アリストIPPpos(B.C. 435-355)〕

アリストIPPposは、北アフリカのキュレネ(現在のリビア)出身でソクラテスの名声を慕ってアテナイに来たとされているが、彼の生涯については余り知られていない。言い伝えによれば彼はどんな環境にも上手く合わせて振舞うことができ、社交上手であったようである。彼の教えは、一口に言えば、人間の幸福は感覚的な楽しみ(快楽)をできるだけたくさん手に入れることであり、最高の善は快楽で最大の悪は苦痛だということであった。彼の教えは、要するに快楽主義というものである。しかし快楽にも肉体的な快楽や、私たちが何か善いことをしたときに心の中に感じる「すがすがしさ」、すなわち精神的な快楽があって、アリストIPPposがそのどちらを重視していたのかははっきりしない。どちらかということアリストIPPposは肉体的な快楽を重視していた——彼の教えとして次のような言葉が伝えられている。

身体の快楽の方が精神の快楽よりはるかに優っている。

現代の我々にとっては、彼の教えは都合がよいのかもしれないが、どうも釈然としない。彼は享受すべきは「現在の快楽」というような趣旨のことも言っている。現在の快楽というものは時がたてば消えてしまうものなのだから、余りにもむなしいのではないだろうか。我々としてはもっと永続する快楽、つまり精神的快楽が必要だろう。

2. エピクロス派〔精神的快楽主義、創設者：エピクロス(B.C. 341-270)〕

アリストIPPposは、快楽主義を主張したが、彼の言う快楽は余りにも利根的で虚しくあまり多くの人々の関心を買うことはなかった。というよりも彼の説は、当たり前のことだったのである。しかし死後、この肉体的快楽とは違う精神的快楽を幸福の源とする人が、ギリシア本土のアテナイに出現する。それが、このエピクロス派の創始者エピクロス(B.C.341-270)だ。エピクロス派という名称は、当然この人物に由来する。エピクロスはアリストIPPposの弟子ではない。彼の生涯については詳しいことがわかっている。彼は、ソクラテスの死後、紀元前341年にギリシア沿岸のサモス島に生まれた。14歳の頃から学問を始め、18歳のときアテネで兵役に就いた。その頃のアテネは、同じギリシア民族とは言えアレクサンドロス大王が支配するマ

ケドニアの圧政に苦しんでいた。アレクサンドロスが亡くなると、アテネでは、マケドニアに対する反乱が起こり、エピクロスもこの反乱軍に加わった。しかしすでに大国となっていたマケドニアにアテネが勝てるわけがなく、反乱は鎮圧され、エピクロスは身を潜めて生活しなければならなかった。彼はその後20代を貧困と亡命の生活に費やし、その苦難の中で自分の思想を深めていったと伝えられている。彼のモットーに「隠れて生きよ」というのがあるが、これはこの生活の中で生まれたものと想像される。彼は35歳頃になって、はじめてアテネに庭のついた家を手に入れることができ、そこで気のあった男女の人たちと、平等で質素な共同生活を送ったそうである。そこでは友情と信頼がおおいに尊ばれた。

彼の教えは、要するに人間の教えは精神的な快楽である。彼によると、人生の目的は、快楽であり、これは疑いようがない。苦痛がないときには快楽を求めはしないのであるから、苦痛は恐れるに足りない。苦痛があってこそ快楽が引き立つ。そして人間の幸福は、一時的な肉体的な快楽ではなく、できるだけ長く続く永続的で精神的な快楽であるとされている。もちろん彼は肉体的な快楽も幸せの条件であるとしたが、快楽のすべてを求めるとはしなかった。エピクロスが考えた肉体的な快楽とは、勝手気ままな肉体的欲望の充足ではなくて、身体の健康であった。しかし彼が何よりも重視した快楽は、肉体的な快楽ではなく、精神的な快楽であった。彼によれば、この精神的な快楽は、肉体的快楽が身体の健康にあるように、魂の健康にあり、そしてこの魂の健康とは、迷いや様々な肉体的欲望から解放された魂の平静にあるとされている。エピクロスによれば、このような魂の平静さを「アタラクシア」と言っている。「アタラクシア」とは、ギリシア語で、「混乱のない状態」「平静さ」「情念からの自由」ということである。エピクロスは、人間の幸福は、一時の欲望に駆られることなく、理性を用いて何が永続的な快楽かをよく見極め、できるだけ質素な生活をするにありと考えていた。この点で彼は、調和と中庸を重んじるギリシアの伝統を踏まえているとすることができる。アリストテレスの倫理学もそうである。また先ほど彼のモットーは「隠れて生きよ」ということだったが、これは、公の世界は余りにも煩わしいことが多すぎる、人目を避けてひっそりと満ち足りた生活をするのが、人間にとって一番の幸せな生活であるという意味なのである。仕事や様々な出来事に翻弄されている今日の我々にとっても「魂の平静さ(アタラクシア)」といい「隠れて生きよ」という彼の考えは、何かしら訴えかけるものを持っているように思える。我々の中にも、せわしなく働かざるを得ないこの巨大な技術社会を離れて、どこか人里離れたところに引きこもり、気心の知れた人たちと悠悠自適の生活をしたいと望む人は少なくはないのではなかろうか。

なおエピクロスは、デモクリトスの原子論を採用して、人間の魂の平静さ(アタラクシア)を妨げる最大の不安である死の恐怖からどうしたら逃れることができるかを教えている。というよりも死は恐れるに足りないと言っている。彼によれば、すべては様々な原子から成り立っており、人間の魂も原子からできている。そして人間は死ねば、人間を構成している原子は、ばらばらになって四方八方に飛んでしまうのであるから、死を感じるべき魂も消えてなくなってしまい、死の恐怖を味わうことはできないとしている。エピクロスは、死について次のように言ったと伝えられている。

身体の結合全体が解体されると、魂は散り散りになり、もはや以前と同じ機能を持つことも、運動することも、したがってまた、感覚を持つこともない。死は、我々にとって何も

のでもない。なぜなら、死によって分解されたものには、感覚がないが、感覚のないものは、我々にとっては何ものでもないからである。死は、諸々の悪のなかでも最も恐ろしいものとされているけれども、それは我々にとって何ものでもないのである。なぜなら、我々が存在しているときには、死は我々のもとにはないし、他方、死が傍らにきているときには、我々はもう存在しないからだ。

しかしこのように精神的快楽を重視するエピクロスの教えは、やがて誤解され、エピクロス派(Epicurean エピキュリアン)といえは、肉体的快楽を追求する快楽至上主義者を指すようになってしまった。「隠れて生きよ」というエピクロスのモットーは、闇雲に「今を生きよ」「今を楽しめ」という肉体的な快楽を追求する言葉に置き換えられてしまったのである。

(レポート指導教員 山田耕太)